Osaka University Knowledge Archive

Title	フィクションとしての歴史 : ウォルター・スコットの語りの技法
Author(s)	米本, 弘一
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46584
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【31】

氏　　名	米本弘一（よねもと こういち）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　１９７６２　号
学位授与年月日	平成 17 年８月２日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位論文名	**フィクションとしての歴史ーウォルター・スコットの語りの技法ー**
論文審査委員	（主査） 教　授　玉井　暲 （副査） 教　授　柏木　隆雄　　教　授　森岡　裕一　　助教授　服部　典之

論文内容の要旨

本論文は、イギリスの 19 世紀初頭の小説家・詩人であるウォルター・スコット（1771－1832）を取り上げ、その主要小説の中から特にスコットランドの歴史を題材とする作品を中心にして、小説における語りの技法を分析することを通しスコットの歴史小説の特質を明らかにした研究である。論文全体は、序論を含む全９章、結論、注、参考文献から構成されており、総頁Ａ４判で 172 頁、400 字詰め原稿用紙に換算して約 520 枚からなる論文である。

序論としての第１章において、スコットの小説を再評価する視点として、スコットにおける社会の発展と連続性を意識する歴史観の存在と、みずからの出身地スコットランドの歴史に寄せる強い関心、特にジャコバイトの反乱事件に対する姿勢とが重要なポイントであることを説く。論者は、新しいジャンルとしての歴史小説の誕生は、この特質に由来することを指摘し、さらに、ロマンスとノヴェルとの類似・差異性と、夢の世界と現実性志向との二面性を明らかにすることにより、スコットの歴史小説の全体的特徴の輪郭をまず提示する。

本論で取り上げられる小説は、『ウェイヴァリー』(1814)、『ロブ・ロイ』(1817)、『ミドロジアンの心臓』(1818)、『ラマムアの花嫁』(1819)、『レッドゴーントレット』(1824) からなる長編小説５編と、短編小説集『キャノンゲイトの物語』(1827) である。第２章以下の各論では、それぞれ一章を費やして、これらの小説テクストにおける語りの技法の解明とその意味についての考察をおこなう。『ウェイヴァリー』では〈受動的な主人公〉と語り手との関係が（第２章)、『ロブ・ロイ』では一人称による語りの意味が（第４章)、『ミドロジアンの心臓』では女性主人公における肉体の表象と共存するリアリズム的・ピカレスク的・ロマンス的叙述との関連が（第５章)、『ラマムアの花嫁』では、作品としての優れた構成と統一感に関して、絵画的描写と劇的描写の果たす機能が（第６章)、『レッドゴーントレット』ではテクスト中に挿入された手紙、日記、〈物語の中の物語〉における語りのありようが（第７章)、それぞれ、語りの技法という観点から一貫して分析・考察されている。短編集『キャノンゲイトの物語』については、その中の特に「ハイランドの寡婦」と「二人の牛追い」の二編に注目し、架空の作者が物語世界に登場する意味を考察し、そこに近代的短編小説に通じる新しい面を指摘している（第８章)。

第３章「作者スコットのペルソナ」と第９章「スコットの最後のペルソナ」は、スコットが小説作品の発表に際して匿名を貫いた事実、そして晩年にいたって『キャノンゲイトの物語』で始めて作者名を公表した事実に注目し、この匿名性がスコットの物語空間の創造といかに関わっているかを考察している。「結論」は、以上の議論をふまえて、スコットは物語空間にフィクション創造という遊びの要素を導入し、歴史を複数の視点から複雑な構造を使って描くことにより、フィクションとしての歴史の本質を明らかにしようとしたのであると結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ウォルター・スコットの数多くの小説作品の中から、スコットランドの歴史、特にジャコバイトの反乱を中心とする歴史から題材を採った小説に注目することにより、スコットにおける歴史小説の確立とその意味を考察して、スコット小説の再評価をめざした研究である。この目的のために、論者は、スコットの小説における語りの技法を綿密に分析し、用いられる技法の種類の多様性、その性格の複合性、技法が駆使される場に展開するダイナミズム性等を明らかにして、従来のスコット研究では不十分であった、技巧派小説家としてのスコット、物語空間の創造にきわめて意識的な小説家としてのスコットの姿を鮮明に描き出すことに成功した。また、技法の分析、あるいは作者の匿名性の問題の考察に当たっては、論者は、現代批評理論におけるナラトロジーの知識ないしは方法論を導入するにしても、必要かつ十分な咀嚼を経たうえで、〈現実の作者（リアル・オーサー）〉の存在を前提にして極力具体的に活用をおこなっていることも、本論の注目すべき特徴である。さらに、論者は、小説テクストに対して丁寧にクロース・リーディングをおこない、目配りの効いた手堅い作品論に仕上げるのも巧みで、『ミドロジアンの心臓』論、『レッドゴーントレット』論はその代表であろう。本論文は、各論で中心的に取り上げた個々の作品のほかにも、たとえば『アイヴァンホー』など他の小説に言及する場合も多く、究極的にはスコット小説群の総体を視野に入れた論になっており、日本におけるスコット小説の本格的な研究として高く評価できる。

ただし、本論文において問題点がないわけではない。論の構成に関して、個々の作品論と技法の諸問題を考察する章との間の有機的関連性をより一層明確にするために、論の組み立ての工夫・検討が望まれよう。また、スコットのジャコバイトに対する関心のありようとその意味をもっと掘り下げて論じる余地も残されていよう。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。